



妙たえの光ひかり

通刊29号 復刊4号
1991年12月20日(季刊)
角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜
〒953 ☎0256-77-2025

御お会え式しき桜

冬枯れのこの時期、本堂脇の中庭で、梅のような小さな花をつけた桜が風にゆれている。毎年十月中旬になると葉が散って、次に白い花とピンクの花が混じって一つ二つと咲き始める。十一月初旬に満開、その後少しずつ花を落としながらも、春三月新しい葉が出てくるまで咲いている。

日蓮聖人が弘安五年(一二八二)十月十三日、今の東京池上の地で亡くなれると、時ならずして山の桜が一せいに咲き、天地も大聖人の死を悲しまれたと伝えられている。以来これにちなんで、御会式と呼ばれるご命日の法要に、桜の造花をお飾りするならわしとなっている。

ことに池上本門寺での御会式前夜は、一晩で四十万人の人出で騒わい、繰り出す桜の造花で飾られた百数十基の万灯は有名。

毎年の妙光寺の御会式を飾ってくれるこの桜、寒桜という種類とかで、春の桜と違い寒風にゆれる姿はかれんそのもの。

まず自らの死に臨んだときのことを想いなさい、
その上でどう生きるべきかを考えよ。

小 川 英 爾

九月末のある夜、横浜と埼玉県上尾のお二人から相ついでお電話をいただいた。偶然にも両方「母が危篤状態で近日中にもお世話になることと思いますので、その節はおねがいします」という内容。十月に入ると会議で山梨と東京への出張予定があり、ぶつからねばよいかと懸念しつつ受話器をおいた。

数日後まず上尾の大野さんから、実家の独り暮らしの母、野本ウメさんが九十歳で亡くなられたとの連絡。東京出張とぶつかったが、友引で葬儀が一日延びて務めることができた。野本ウメさんは新潟県小千谷市の生まれ、長岡市の旧家に嫁いで二人の娘をもうけた。しかし時代の流れで家は凋落、夫は石油を掘り当てると出たまま戻って来ない。二人の娘は嫁ぎ、家は崩壊、晩年は新潟市の老人ホームで暮らす日々であった。その面倒を見てきたのが上尾に住む次女の大野文子さん。昨年の大晦日、父親すなわちウメさんの夫が、上野駅近くで死亡していたとの連絡で正月早々に葬儀、長岡市の墓に埋葬も済ませた。墓にはその父の内縁の妻も埋葬されている。これを機に子供がなく自身も申し込んだ大野さんの勤めで、ウメさんは安穩廟を申込み元氣な足取りで妙光寺を訪れ、自分の葬儀も依頼されていかれた。残された日記には、老人ホームの窓から眺められる角田山に向かって毎日手をあわせ、山にかかる雲の形に心動かされる日々様子が綴られていた。その角田山の麓に大野夫妻、九十一歳の妹らの手で埋葬された。

野本ウメさんの埋葬の日の前日、横浜の七種さんから母の山口トリさんの死が伝えられた。やはり友

引で葬儀が一日延び、先約の法事と重なることなく務めることができた。トリさんは会津生まれの父と、新潟の妙光寺檀家出の母が横浜に駆け落ち、そこで生まれた一男二女の長女。生活は苦しく、弟妹を背負って学校に行ったことも。その弟を関東大地震で亡くし、両親ともに妙光寺に眠る。山口姓を残すためにトリさんが婿養子を迎えるが、長女君子さんを出産して間もなく死別。君子さんは父の顔を知らず母独り娘一人で育ち、長じて九州出身の七種氏と結婚、姓は変えたがトリさんと同居。このご主人も一人娘ミカさんが成人すると間もなく癌で急逝、三代続く母娘一家となった。

九十一歳を過ぎたトリさんが入院して二年、体の弱い君子さんに代わって孫のミカさんが、友人の応援をもらって熱心に看病に当たった。危篤状態に入って一ト月半、意識のないはずのトリさんが「雨の日も風の日も毎日看病ありがとう」と言い残して逝った。おばあちゃん子のミカさんは納棺の前夜、同じ布団に添い寝した。こじんまりした葬儀であったが、心なごむものがあつた。

今年も十数件の葬儀を務めた。いつもお通夜の席で、お説教らしきことをもうし上げるようにしているが、故人の長年の人生をそう簡単に振り返り、語り尽くせるものではない。ただご遺族の方々の心痛を少しでも和らげて差し上げることが出来ればと考えるだけでせいっぱいである。しかし、都合で葬儀は代理をお願いしたが、四十九日をお務めた石田さん。三十五歳のお母さんを亡くした三人の幼子の一人の「いい子にすればお母さん帰ってくるネ」の言葉に、読経の声もつまってしまった。同じ頃、三十六歳のご長男を亡くされた木村さんご夫妻、火葬場の帰り道「どこにもやらない」と言わんばかりに遺骨をしっかりと胸にかかえた母親の姿に、かける言葉もなかった。

日蓮聖人の『人の命は無常なり、(中略)老いたるも若きも定めなきならいなり。さればまず臨終のこゝとをなろうて後に他事にならうべし』のお言葉が実感された今年であった。

和やか賑やか巻講中

妙光寺には地区毎に講中があつて、現在定例で活動しているのが八講中。中でも大所帯の一つが巻講中である。

現在休んでいる二軒を除いて二十人が毎月一回当番のお宅に集合、約三十分間のお勤めの後ご前様のお話、そしてお茶とお菓子で和やかに談笑となる。町の人特有の明るさかさざまな話題で盛り上がり、ときには腹を抱えて笑うこともしばしばという楽しい雰囲気である。

毎月一回の他に、不幸があればお講仲間はもちろん、旧巻町と隣りの割前地区の六十軒近い妙光寺檀家のお宅のお通夜、野辺送りに参列する。

毎月の集まりの楽しみの一つに無尽がある。千円ずつ出して簡単なクジを引き、当たった二人に一万円ずつが渡さ

れる。全員が一当りする十カ月に振り出しに戻るから不公平はない。他に月々のお講銭が二百円。これを積立てお寺への奉納や日帰り旅行に充てる。去年はのぼり旗を一組奉納した。

こしはばらく高齢の人が病気等で人数が減り心配されたが、五十歳台の人が一人二人と加わって若返り、一段と賑やかになった。十一月には十人が角田講中の日帰り旅行に合流して、新発田市の蓮昌寺様に参拝、月岡温泉で半日過ごしてきた。カラオケこそ出なかつたものの賑やかな旅行になり、来年は一泊しようと思つてる程。

そもそも講中とは江戸時代に盛んになった、町や村で庶民を中心とした信仰の集まり。そこでは祖先供養や祈願、自分達の修行といったことが行われ、



ことに広く民衆を救うといった日蓮宗で活発だった。町や村中心だったから必ずしも寺中心でなく、その運営、指導も自分達で行われたことから、同じ檀家の集まりとは限らないところもある。その庶民の支えで寺があつた訳で、巻講中にはそんななごりが感じられる。

市川智康師をお招きしての御会式

十月十二日、東京池上本門寺での日蓮聖人ご命日の御会式法要に、角田の三十、四十歳代の若夫婦八家族三十七人が貸切バスで参拝しました。折り悪しく台風とハチ合せしたものの不思議に影響を受けず、繰り出した万灯の数々に圧倒され、盛大でござりかな雰囲気堪能することができました。宿に入って子供達が寝静まってからは騒やかに懇親会。翌日の日曜日一日多摩市のサンリオ遊園地で楽しく過ごし、夜元気に帰着。

その池上本門寺から、名布教師として名高い市川智康師をお招きして、十月二十二日妙光寺の御会式を営みました。当日は八十人余りの参拝の方達とともに午前中は日蓮聖人第七百十回忌

の法要を、午後に一時間半にわたって市川師のお話をお聞きしました。師のお話とはかく厳しい印象を持ちがちな日蓮聖人のお人柄を、本門寺に伝わる聖人像の修復前のお写真や遺されたお手紙の数々から、人間味あふれる優しいイメージを思い起こさせてくれるものでした。

御会式行事が一段落した十月二十三日から、かねてより懸案の客殿床下防湿工事に着工しました。まったくありがたいことに好天に恵まれて工事も順調に進捗、床下に打ったコンクリートが乾ききってから床板張り、これを機に一部分新畳に入れ替えてお正月には文字通り気分が一新します。

お正月と言えば、一日夜十時半から

新潟総合テレビ(フジテレビ系列)のドラマ「しあわせ旅館物語」の中で、妙光寺の鐘がチャリと映ります。先日主演の高島政信さん(俳優高島忠夫さんの次男)らがおいでになってロケをしていかれました。除夜の鐘には間に合いませんが、高島政信さんの撞く妙光寺の鐘の音が全国のお茶の間に届くという訳です。お楽しみに。



転居ご希望の方が多のですが……

安穩廟お申し込みの何人かの方から、近くに引越したいとのご希望が前々から寄せられています。栃木県でお一人暮らしのSさんは、ご紹介した新潟市の軽費老人ホームに申し込みをされました。もちろんすぐの入居はできず、

順番待ちの状態ですが。また北海道のGさんご夫妻はご主人の持病の喘息がひどいので、寒い北海道を離れて新潟に家を求めたいとのこと。神奈川県にKさんは親の遺骨の眠る地に別荘を求め、時々来たいと。その他にも何人かの方達からご相談があります。

しかし心当りを探してはいるのですが、今のところそれに手頃な土地も貸家も見つからず、さりとて新潟県には有料老人ホームもありません。建売り住宅はありますが、病院等への利便

性に難があるなど、転居されても将来のさまざまな問題を考えると、十分な見通しのもとなないと仲々むずかしいように思われます。

そんな中で先日、新潟市のキリスト教会が新しいタイプの「ケアハウス」を三年後に建設する計画で、六億五千万円の募金を始め、市も応援するかと新聞記事が目にとまりました。お年寄りが年金の範囲内の費用で入居でき、個室で自立した生活が営める施設で定員予定が五十人とか。感心しました。規模や形はともかく、老人に限らないこういう施設がここにあれば、皆さん

のご相談に応じられるのだかと思っただけ。しかし慢性的な入居不足の妙光寺の現状では、今すぐどうにも動けません。でもさし迫って困っておいでの

方々が力を合わせれば、何か形になるとかとの思いもありますので、ご希望やお智慧がありましたらお寄せ下さい。皆さんにご紹介しますので一緒に考えましょう。

さて、近頃マスコミで遺骨を海や山の自然の中へ撒くという散骨が話題になっていきます。自然葬と言っています。現実には抵抗感のある方が多いようです。この運動の中心である安田さんが、一昨年八月の妙光寺でのフェスティバル安穩で提唱されたのが始めて、安穩廟も散骨ではありませんが、自然葬に近いものではあります。この辺のことが一月五日発売で徳間書店刊の月刊『サンサーラ』で紹介されるそうです。大きな書店でないとうまく入手しにくいのかも知れません。



失格母さん



四人の子供たちの保育園、学校が休

みの日曜日は、だいたいお寺の仕事がある。だから子供は一日家で過ごすことになる。時々「○○ちゃんはどこどこへ行ったんだよ」と言うこともあるが、親が思うほど子供たちは気にしていないようなので安心ではある。ともあれ、この休日の過ごし方が問題になってくる。

お寺で行事や法事の無い時は留守番をしていけばよいので、台所で遊ぶことが出来る。パン、クッキー、手打ちうどん、ケーキ、カレーライス作りなど、台所の汚れ方が三倍なのさえ我慢すれば、結構おもしろがって半日は退

屈させずにすむ。

秋の暖かい日には庭の落ち葉集めをする。よく燃えるのは杉の葉っぱで、子供たちが枝ごとひっぱってくる。私は熊手で松、桜、けやきなどの葉を集める。大きな山が出来たところで焚き火である。もちろん檀家さんからだいたいだいた、おいしいさつまいもを焼く。

袋の中から気に入った芋を選び、アルミ箔につつんで入れる。焼けると火の中から、自分の入れた芋の形を覚えていてちゃんと探し出すのだから驚いてしまう。姉妹が多いと、妙な感覚が身についてしまうようで、おかしいものだ。

忙しいのにかまけて、ほとんどはったらかしに子供を育てた。塾やおけいこ事もなにひとつやらせていない。テレビも見たい放題、おやつも食べ放題。「うるさい！」とどなりつけて理屈もなにも無い。特にだめなのは行儀で、保育園の先生にも「お寺さんの子供なのに」と言われて、赤面したこともある。

子は親の鏡、という言葉が一番こわい。お母さんの真似しちゃだめ、と言うようにしているのだが、困ったものだ。

それでも、特技は？と聞かれて、いつの日か「遊ぶことでーす」とでも答えてくれたら嬉しいと、失格母さんは思う。

(小川なぎさ)

行事案内

除夜の鐘

大晦日夜十時半より本堂で除夜法要、引き続き十一時四十分頃より除夜の鐘を撞きます。どなたでも先着順で鐘楼堂前に並んで、一人一回づつ撞いていただきます。撞いた方には記念品と抽選で楽しい縁起物の景品を差し上げます。同時にこのとき、本堂前で古いお札、注連等のお焚き上げを行いますので、御希望の方はお持ち下さい。

毎年除夜の鐘参拜の方の自動車が一時集中し、雪もあつたりすると危険です。臨時に灯光器も用意しますが、十分ではありませんので運転の方は徐行安全確認をくれぐれもお願ひします。

元旦年始受け

一日朝より午後にかけて年始受けをしております。十一時過ぎからお酒の

用意もあります。二日の年始受けは地元角田浜のお婆さん達が中心です。

住職家族の休暇による不在

年中無休の妙光寺では、檀家に限らない多くの方々の来訪、電話が朝から夜まであります。さらに出かける用事に事務、掃除とそこに務め住む住職及び家族は気の休まる時がありません。元気なときは苦にならないのですが、忙しい日が続いたり、体が不調だったりすると人に会うこと自体が苦痛になってきたりしますので、体調を保つことにいつも気を使っています。

その身心の健康のためにも、久し振りに休暇を取ってリフレッシュしたく思います。期日は一年を通じて割合い暇な一月末の十九〜二十五日。この間不在となりますが、留守番はおりますので、連絡は取れます。ご理解ご協力の程をお願いします。

あとがき

文字通り坊さんも走る師走、暮れの檀家回りに精出していきます。ありがたいことに小春日和のいい日が続いて助かりますが、冬の天気はゴロゴロと雷が鳴ると一変してバラバラとみぞれになったりするので気をもめる毎日です。

境内の松の木に松食い虫の被害が始め、防除の見積りを依頼したらかなりの費用。これでは全部の木を守ることができず、この古い松の木々の風情がなくなるかと思うと胸が痛みます。憎きは松食い虫ですが、これも自然の摂理かとも考えたりしています。良いお年をお迎え下さい。

(小川)

